

「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。」
(詩編 37 : 5)

私たちは昨年(2017年)の12月18日、新たに一家族を受益者として受け入れました。それは、1歳3か月の双子の女兒とその母の3人です。通常、私たちの対象者は、リリマに居住し、教会や地域のリーダーの要請があった人たちから選ばれますが、今回は例外でかつ緊急の判断でした。なぜなら、双子は1歳を過ぎていながら生後3か月余りの体重で、このままでは早晩ふたりは死に至ると考えたからです。

母・マドリーンは、身分証明証に1990年生まれと記載してあるようですが、自身の生年月日を知らない孤児であり、孤児院で育ちました。加えて、彼女にはてんかんがあります。彼女の背中には、大虐殺の争乱当時負った大きな傷跡と左腕には、てんかん発作の際に負った火傷の跡があります。身寄りがなく、スラムのような地域に居住し、物乞いをして命をつないでいたのです。これらの背景からトラウマを負うに十分であり、さらに子どもたちを養育する能力はない、と判断したのです。

この親子に出会ったのは、昨年(2017年)の10月、キガリの拙宅の隣にある小さな食堂でした。食堂内の細長いベンチに寝かせられ、落下するのではないかと危惧したのですが、双子はまるで新生児の様に動きません。赤ちゃんらしい笑顔はなく、この双子が1歳と聞いて驚いたことでした。ふたりは、親切な食堂の女主人によって、時々治療用の離乳食を食べさせてもらっていましたが、これだけでは到底足りません。さらに11月の1か月間、食堂にこの親子は現れませんでした。

私は、2000年にエチオピアの東部で5歳以下の栄養失調の子どもたちを治療した経験があります。その治療所にやって来た重篤の栄養失調の子どもの中には、到着後24時間以内に亡くなる子どもがありました。当時の経験とこの双子がオーバーラップし懸念が増大するのです。12月16日、突然この母子が我が家の門を叩き、母子の背景を知るに至ります。この日、双子の体重は2か月前と同じで増加していません。さらに、ふたりは咳をして熱がありました。

すでにこの状態は、私が仕事の合間に何か手助けをする、と言うレベルではなく24時間の継続したケアが必要です。マドリーンに説明し同意を得て、12月18日リリマへ母子を送りました。

これは私の独断でした。しかし受け入れた現場は大変でした。なぜならマド

リーンは、彼女の背景に起因する多くの心理的・精神的問題を抱えているからです。例えば、嘘を言う。センターの塀によじ登り道行く人に向かって、「ミドリが強制的にここへ連れて来た、監獄のようだ」などと大声で叫ぶ。リリマで労するスタッフに対し、低俗なあだ名をつけて呼ぶ。スタッフが作った双子用の離乳食が気に入らなくて何度も作り直させる、彼女に提供した食事を拒否する…など多くの問題行動がありました。さらに彼女の言動と行動から、双子を置いて姿を消すのではないかと危惧した時期もありました。

私たちは話し合いを重ねて、「愛を示すこと、忍耐すること、教えること…」などを確認したのです。そうした中、関係者のひとりが言いました。「マドリーンは地獄から天国へ来た。天国での生活に当惑しているのだ」と。

私たちスタッフの奮闘と忍耐が続きましたが、1か月を過ぎて明らかに彼女は変わってきました。硬かった表情が和らいで、笑顔が見られるようになり、かつて自分の好む食事でなければ拒否していましたが、今では「ありがとう」と謝意を表現するようになりました。双子の世話によく協力してくれたアタナジィと彼女の子どもたちですが、週末マドリーンは山のようにあるアタナジィ家の洗濯を手伝っていました。

双子は、大幅に遅れてはいますが発育しています。健全な発育では生後3か月頃に首が座るのですが、この双子はまだ不安定でした。しかし今では、しっかり座り、これまではできなかった自力で座ることができるようになり、2週間前には寝返りができ、離乳食の固形物は自分で掴んで食べるようになりました。ふたりは、私がリリマを訪れるたびごとに成長し変貌しています。

当初マドリーンは難しいケースと思っていましたが、彼女だけが特別なわけではありません。私たちの受益者は、すべて何らかの原因で心に傷を負い病んでいる人たちなのです。難しいのは当然であり、これが私たちの働きなのです。それにしても、マドリーンは短期間で変化の兆しが現れ喜んでいきます。

クリスマスから1か月余りは、マドリーン一家に翻弄されて、喜びを十分味わうことはできませんでしたが、17歳になるアタナジィの長女・ベリーゼが12月30日洗礼を受けました。昨年1月にはアタナジィ自身が、そして12月には娘が受洗し、1年間に一家族の中でふたりのクリスチャンが誕生したことになります。これは、大きな喜びであり私たちにとっても祝福です。ベリーゼは、昨年11月に小学校を卒業し、今後については次回の短信でお知らせ致します。

長らくご無沙汰をして申し訳ありませんでした。私たちの働きは、神様の導きと守りの中で進められています。今年もどうぞよろしくお願い致します。

2月6日

竹内 緑



左からドルカス、エステル。センターにて。
(2018年1月4日)



エステル、母マドリーン、ドルカス (2018年1月4日)



洗礼式用の真紅のドレスを着たベリーゼ



アタナジー家の子どもたち
左からサムエル、パシフィック、ジェローム、パトリック、
アリス、ベラ、ベリーゼ